様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０４２９

研究課題名（和文）東ティモールの国民文化に関する歴史人類学的研究

研究課題名（英文）A Historical Anthropology of Nationalism, East Timor

研究代表者
福武　慎太郎（Fukutake, Shintaro）

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：８０４３９３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：2002年に正式独立を果たした南洋の島国、東ティモール民主共和国のナショナリズムに関連する問題について、現地におけるフィールドワークと文献調査で得られた知見にもとづき考察をおこなった。東ティモールの公用語であるテトゥン語を共通言語とし、カトリック信徒で、かつティモール島南部にかつて存在した王国とのつながりを共有するテトゥン社会は、東西国境をはさみ合計50万人規模であり、人口100万人の東ティモールにおいてけっしてマイノリティではない。親族や姻戚関係、そして商業目的での国境の往来は頻繁におこなわれており、「東ティモール人」アイデンティティを理解する上で重要な文化圏であるとの見解に至った。

研究成果の概要（英文）：This study aims to consider the issue of nationalism in the democratic republic of Timor Leste, based on the data and knowledge I learned from literatures and my field research in East Timor. By interviewing with local people and reading monographs, I found that there is a large community which shares language, religion and a history of an ancient kingdom beyond the border between East and West Timor.

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：東ティモール　ナショナリズム　歴史　言語　キリスト教

１．研究開始当初の背景

(1)　2000 年初頭より、インドネシア領西ティモールで、1999 年の住民投票後の騒乱に伴う東ティモール難民の調査を開始した。その結果、難民キャンプだけでなく、親族関係をたよりに村落社会でも避難生活を送っている人々が少なくないことが判明した。とくにティモール島南部では、東ティモール西部地域の住民が多く避難していることがわかった。

(2)　2003 年より、東ティモール民主共和国コバリマ県にて元難民への聞き取り、紛争後の和解の問題に関する聞き取り調査を実施してきた。この調査過程のなかで、東西国境をこえて人々の親族・姻戚関係がひろがり、独立以前に頻繁な行き来があったこと、1999 年の騒乱時にも親族をたよりに避難したひとが多かったことがわかった。そして文化的にもインドネシア領側にかつて存在した王権とのつながりが強いことが、聞き取りの結果明らかになった。

２．研究の目的

(1) そこで本研究では、独立後の東ティモールの「国民文化」に、インドネシア領西ティモールにかつて存在した王権が、どの程度影響を及ぼしているのか、現地における調査および文献調査から、明らかにすることを目的とした。

(2) 多言語社会である東ティモールにおいて、独立後の国民統合のために国民文化がどのように表象されうるのか、とくにティモールの文化の構成要素であるテトゥン社会の文化がどのように記述され、語られ、展示されているのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1) 上記の研究の目的を達成するにあたって、東ティモール民主共和国におけるフィールド調査による聞き取り、資料収集、および東西ティモールの歴史文化に関する文献史料の調査を実施した。

４．研究成果

(1) 現在の東ティモール民主共和国の国民の 98%がカトリックの信徒である。東ティモールは、ポルトガル人が到来した 16 世紀以来のカトリック社会であると理解されてきた。そのことから東ティモール問題とは、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシア共和国と住民のほとんどがカトリックの信徒である元ポルトガル領という宗教対立であると誤解されることが多かった。しかし実際は、インドネシアによる侵略を受けた当時、東ティモールのカトリック人口は３割に満たず、人口の 72%は祖先祭祀を中心とする信仰体系を保っていた。

(2) カトリック人口が急増したのは、イスラーム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー、仏教のいずれかの宗教への帰属を国民の義務とする国家原則パンチャシラを掲げるインドネシアによる植民地下においてであった。むしろオランダ領東インドであったティモール島西部において、カトリック化が先に進んだ。

(3) オランダは 1808 年からフローレス島におけるカトリックの布教を解禁、イエズス会の宣教師が、ティモール島西部で布教活動を展開した。1913 年よりドイツで設立された修道会「神言会」が引き継ぎ、活発に布教活動を展開した。

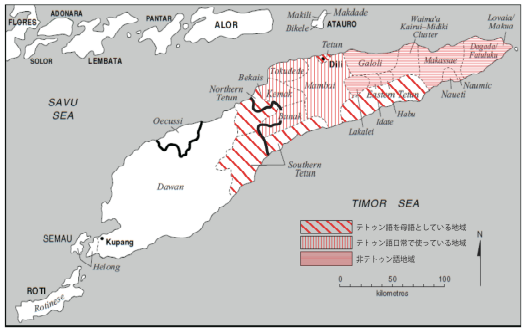
(4)しかしティモール島西部でもカトリック信徒数が急激に増加するのは、インドネシア共和国が正式に独立を果たす 1950 年代以降のことである。イスラーム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー、仏教のいずれかの宗教への帰属を国民の義務と定めた国家原則（パンチャシラ）の影響が大きい。1961 年のデータによると、アタンブア教区の住民の 90%（38 万人）がカトリックの信徒となった[Smythe 2004:71]。

(5) 他方、1975 年までポルトガル領であった東ティモールでは既に述べたように、インドネシアの軍事侵攻の時点で、72%が非カトリック系の住民であった[Kohen 2001]。1556 年にドミニコ会士であるアントニア・タベイラが布教活動を開始して以来、1640 年までに 10 のミッションと 22 の教会が建てられたとされているが、それは沿岸部に限定的だった[Gunn 2001:3-14、Molnar 2010: 18-19]。ドミニコ会は 18 世紀半ばまでに北沿岸部の町マナトゥトゥと飛び地であるの二カ所に神学校を建設している。1834 年に植民地政庁との関係が悪化した結果、ティモール島から追放されたドミニコ会にかわり、19 世紀後半よりイエズス会やサレジオ会がポルトガル領ティモールで活動をはじめた。1899 年にイエズス会は、東南部のソイバダに神学校をつくり、伝統的首長たちの子息を中心に神学教育を開始した。しかしながら 1910 年にポルトガルの共和制以降に伴い、全てのポルトガル領から修道会は追放され、1950 年代後半までポルトガル領ティモールにおける修道会による活動はおこなわれなかった。1960 年代近くまで、ポルトガル領ティモールにおける宣教活動を禁じられていたことも、カトリック信徒が増加していない要因のひとつとして考えられる。

(6)西ティモールも東ティモールもどちらの住民も、パンチャシラにより国家が公認する宗教への帰属が求められ、もっとも身近であったカトリックを選択したと考えられる。イ

ンドネシア時代のカトリック教会がもたらした重要な影響の一つは、典礼言語としてテトゥン語を採用したことである。第二バチカン公会議のあと、バチカン直轄区であった東ティモールは、インドネシア支配にあってもインドネシアのカトリック教会の教区ヒエラルキーに入ることはなかった。そのためインドネシア語を選択する必要もなく、1981 年、州都であるディリを中心に共通語となっていたテトゥン語を使用することを決定した。

(7) ティモール島には 22 言語あり、そのうちの 18 言語がティモール島東部に集中している。このなかで圧倒的な多数派言語は存在しない。インドネシア時代に典礼語として採用されたテトゥン語も、その母語としての話者は東ティモール全体の２割程度、地域でいえば州都のあるディリ県、インドネシア領と接するコバリマ県南部、そして東南沿岸部の一部で話される言葉にすぎなかった。このテトゥン語はティモール島中央南部から東部へとひろがったオーストロネシア語族に属する言語であり、ティモール島のその他のオーストロネシア語系の６言語（ロティ、ヘロン、ダワン、ガロリ、ハブ、カワイミナ）と近い[Hull 1993]。これらはティモール島西部の多数派を占めるダワン（アトニ）、ロティ島民などを含んでいる。他方、ティモール島東部のその他のオーストロネシア系言語（トコデデ、ケマク、マンバイ、イダラカ）とはそれほど近くない（地図１のティモール島の言語分布を参照）。

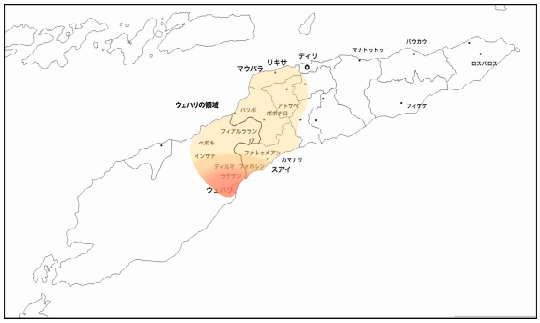



地図 1. ティモール島の言語分布

(8) テトゥン語が東ティモールにおける共通語となったのはカトリック教会による影響もあるが、それに先立ちディリとその周辺地域における共通語として使用されていた。ベル南部の王国の最大領域がディリ近くまでひろがっていたことから、ベルの王権「ウェハリ」とテトゥン語のひろがりの関連性が推測できる。

(9) 現在のインドネシア共和国ベル県南部では、テトゥン語のなかでは言語学的に最も古い、やや複雑な動詞活用を持つテトゥン・テリックと呼ばれる地方テトゥン語が話されている。多くの人々がコメやトウモロコシを主食とした定住農耕を営んでおり、父系出自、夫方居住婚が多数派のティモール島にあって、母系出自、妻方居住を基礎とする慣習法を共有していることも特徴の一つである。ベル県南部にはかつてティモール島の「儀礼的中心」と呼ばれたウェハリという王国があった。ウェハリは、ベル県南部を中心として、現在の東ティモールの西部地域―コバリマ県、ボボナロ県、エルメラ県などテトゥン語、マンバイ語、ブナク語、ケマク語を母語とする地域―をその影響下においていたとみられている。 17 世紀中頃にトパスと呼ばれる現地生まれのポルトガル人勢力がウェハリに侵攻し、その政治権力は弱まったが、ポルトガルとオランダが覇権を争うなか、その後もティモールにおける儀礼的中心として権威を保持した。 しかし 20 世紀初頭、ポルトガルとオランダによるティモール分割統治によって、ウェハリは蘭領東インドの行政下に、そしてその他の地域はポルトガル領ティモールに編入されることになった。

(10) ウェハリによるティモール島西部における覇権はミドルコープの民族誌、東部への覇権の拡大はオリベイラの記録によって確認することができる。ウェハリの支配下にあった領域は、スアイ＝カマナサ、ディルマ、ラケクン、フォホテヘン、ベボキ、インサナ、フォホレン、ファトゥメアン、アトゥサベ、カサバンク、ライメアン、ディルアテ、マロボ、レテン・タロ、ベバオ、バリボ、マウバラの 17 領域である。このうち 4 つの領域が現在のインドネシア領西ティモールに位置する。西ティモール側での支配領域はそれほど広くなく、現在のベル県に相当する地域に限定されている。他方、残りの 13 領域は現在の東ティモールのコバリマ県、リキサ県、ボボナロ県、そしてエルメラ県にまでひろがっている（地図２を参照）。




地図 2. ウェハリの王権の影響範囲

(11) 東ティモール民主共和国のコバリマ県、ボボナロ県、そしてエルメラ県における聞き取り、および当該地域に関連する文献調査の結果、戦争のたびに、東ティモールの西部の人々は彼らにとって「儀礼的中心」であるウェハリの地へと避難した。その際に、祖先祭

祀の中心であるルリックもともに運んだ。彼らにとってその移動は国境をこえることに必ずしも意味があったわけではなかった。インドネシア領西ティモールに存在する移住村の存在から推測するに、これは国境近くの人々に限らず、「ウェハリ＝テトゥン文化圏」の人々のなかで少なくない人々が同様の移動をおこなってきたと考えられる。

(12)結論：オランダ領とポルトガル領にまたがっておこなわれたカトリックの宣教活動は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてはじまった。ポルトガル領ティモールに拠点をうつしたイエズス会にかわって、オランダ領ティモールでは神言会が布教を開始した。しかしながら、実際にカトリックの信徒が急増したのはインドネシア時代に入ってからであった。東ティモールよりも先にインドネシア共和国に編入された西ティモールのほうが先にカトリック化が進み、東ティモールでは 1980 年代以降にカトリック化が進んだとみられる。その際に、テトゥン語が典礼言語として採用されたことによって、東ティモールにおけるカトリック化は「テトゥン語＝ウェハリ文化圏」で特に進んだとみられる。このようにして、東西ティモールにまたがる「ウェハリ＝テトゥン＝カトリック」文化圏が形成されることになった。

(13) オランダ領東インドの西ティモールと、ポルトガル領であった東ティモール。それぞれ異なる宗主国、異なる修道会による宣教がおこなわれたにもかかわらず、東西国境をまたいだ「ウェハリ＝テトゥン語文化圏」を中心に「カトリック化」が進んだ。結果として、元々国境をこえてひろがっていたテトゥン社会にカトリック教会の存在感の強い文化圏が形成された。

これは、国民国家形成時におこりうる国境周辺の「少数民族問題」とは 2 つの意味において異なっている。第一に、ティモール島のこの言語集団は少数ではなく、「多数派」言語集団である。インドネシア領西ティモールのテトゥン＝カトリックの人口はおよそ 20 万人、東ティモール側は 25 万～30 万人で、人口 100 万人を越えたばかりの東ティモール民主共和国において、「少数派」として片付けられる規模の人口ではない。第二に、この国境周辺地域において、「テトゥン＝カトリック」を中心とした民族主義運動は目立つかたちでは存在しない。確かに、ポルトガル時代末期に「ティモールの統一」を主張し、インドネシアとの統合を掲げた政党アポデティや、1999 年の住民投票の時点での反独立派は、そのプロパガンダに同地域の文化が使われてきた。しかしながらこれらの政党など立場への支持は極めて少数である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① 福武慎太郎「[総特集にあたって]グローバル・スタディーズ：地域研究の地殻変動」『地域研究』(査読有) vol. 14, no. 1、2014 年、8-32 頁。

〔学会発表〕（計 1 件）
① 福武慎太郎「「自主避難」のエスノグラフィ： 東ティモールの独立紛争と福島原発事故をめぐる移動と定住の人類学」シンポジウム「グローバル社会を歩くーかかわりの人間文化学」中部人類学談話会／「グローバル社会を歩く」研究会／日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」（会場：名古屋市立大学)、2013 年 7 月 27 日。

〔図書〕（計 7 件）
① 辰巳慎太郎「難民と十字架：ティモール島における宗教と言語の位相からみた国境問題」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム―人類学的比較研究』風響社、2014 年、263-288 頁。
② 辰巳慎太郎「東ティモールの非暴力思想＜ナヘビティ＞」小田博志・関雄二編『平和の人類学』法律文化社、2014 年、95-117 頁。
③ 福武慎太郎・堀場明子編『現場＜フィールド＞からの平和構築論』勁草書房、2013 年、全 196 頁。
④ 福武慎太郎「序章　現場＜フィールド＞からの平和構築論―「ひと」の力を活かす平和のインテリジェンス構築に向けて」福武慎太郎・堀場明子編『現場＜フィールド＞からの平和構築論』勁草書房、2013 年、1-19 頁。（堀場明子との共著）
⑤ 福武慎太郎「第 5 章　市民と議員が平和をつくる―東ティモール自決権行使を求める国際的連帯を事例に」（田中（坂部）由佳子との共著)、福武慎太郎・堀場明子編『現場＜フィールド＞からの平和構築論』勁草書房、2013 年、113-136 頁。
⑥ 辰巳慎太郎「「自主避難」のエスノグラフィ―東ティモールの独立紛争と福島原発事故をめぐる移動と定住の人類学」（辰巳頼子との共著)、赤嶺淳編『グローバル社会を歩く―かかわりの人間文化学』新泉社、2013 年、240-299 頁。
⑦ 福武慎太郎「難民」牧田東一編『国際協力のレッスン―地球市民の国際協力論入門』学陽書房、2013 年、59-73 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
福武慎太郎（FUKUTAKE, Shintaro）
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：80439330